

「見るのだよ！ 気をつけて！」と彼の母親はいった。

肩間尺寸は掘り開けた洞穴のそばに身を伏せ、手を伸して、用心ぶかく気をかけながらボロボロになつた木質をかき分けた、指の先がヒヤツとして、冷い雪にでも触つたかと思つたとき、あの純青透明な剣があらわれたのだ。彼は剣の柄をハツキリ見てとると、それを握つて、とり出した。

「お前はこれからお前の優柔の性質を改め、この剣で仇を討ちに行け！」と母親はいった。
「私はもう私の優柔の性質を改めました、この剣で仇を討ちに行きます！」

「これだけがお願いだ。お前は青い着物をきて、この剣を背負えば、着物と剣とは一色で、誰も見分けがつかない。着物はもうわたしはここにつくつておいた、明日になつたらお前は出発するが、そしてじつと見た。すると何だか五尺あまりの長さが見えるようであつたが、しかしどんな鋭い刃も見えず、刃渡りのところは反つてやや丸みがあり、まるで一枚の葦の葉のようだ。

「わたしのことは心にかけるでない！」と彼女は寝台の後ろのボロ衣裳箱を指して、いたた
眉間尺は新しい着物をとり出して、試しに着てみると、裕太けはちょうど合う。彼はまた元のと
おりにキチンとたたみ、剣をつついで、枕もとにおくと、しづかに横になつた。彼は自分はもう優

鑄劍(注)

眉間みゆんじま尺はいまし方、彼の母親とともに寝たところだが、風が出てきて鍋の蓋を噛り、その音がうるさくてたまらない。彼は低い声で何度もシーツシーツと叱つた。最初はそれでもいくらか効目があつたが、後になるとまったく彼にとり合わないで、ガリガリと噛りつづける。彼は思いきり大声を出して追つ払うこともできなかつた、昼間の仕事の疲れで、夜は横になるとすぐ寝入つてしまつて、驚いて彼はまた眼を開けた。同時にサーサーという音がきこえた、爪で土器をひっかく音であついぶん時間がたつてから、静かになつた。彼は眼ろうと思つた。突然、ボトンという音がしつた、驚いて彼はまた眼を開けた。同時にサーサーという音がきこえた、爪で土器をひっかく音である。

「ああ！」と彼の母親は溜息をついていった。「子の刻になつたら、お前はもう十六歳だ、それだのに性質はそんなふうで、冷いのでもなければ熱いのでもなく、ちっとも変らない。思えば、お

「前の父の仇は誰も討つものがない」
彼は母親が灰白色の月かげの中に坐わっているのを見た、何だか身体があるえているようだ。低い声の中には無限の悲しみがこもっていて、彼に身の毛もよだつほど寒気を覚えさせた。だが一瞬のうちに、たちまちまた全身に熱血が沸き立つような気がした。

「あるのだよ。そしてお前に仇を討つてもらいたい。わたしはずっと前からお前に知らせようと思つていた、だがお前があまり小さいので話さなかつた。いまお前はもう成人したのに、まだそんな性質だ。それで、わたしはどうすればいいのだろう。お前のような性質で、大事を行うことがで

「やあまあ。いつやドヤレ、お母さん。私は改心しますから……」「やあらん。わたししてやがひ話ねばならぬ。お前きいと改心して……。では、いやらへおいで」

劍作魯迅訛增田涉

作
魯迅
訛
增田涉



落した。つづけて彼は芦の棒でもって風の頭を何度も小突いて、それを素早く沈めてしまった。

六回、松明をとりかえた後、風はもう動かなくなつた。だが水の中に沈みながらも、時々また水面に向つてちよつと跳びあがらうとする。眉間尺はまた可哀そうな気がして、すぐ芦の棒を二つに折り、手間をかけてどうにか風を挟んで取り出して、地面においた。風ははじめちつとも動かなかつたが、やがてやつと少し呼吸をした。それからまた大分たつて、四つの脚をバタバタ動かし、ふと身をひるがえしたかと思うと、起き上つて逃げ出そうとするようだ。それは眉間尺を吃驚させ、思わず左脚をあげて、イキナリ踏みつけた。チューという声がしたので、彼は蹲んでよく見ると、口はたに微かに真赤な血が出ていた、多分死んでしまつたのだろう。

彼はまたひどく可哀そうな気がした。何だか自分が大惡事でも犯したように思われて、とても堪え難い気持ちであった。彼は蹲んだまま、気抜けしたように見まもつて、立ち上らない。

「尺や、お前何をしているのだね？」と彼の母親はもう眼をさまして、寝台の上からたずねた。「鳳が……」と彼はあわてて立ち上ると、身体をねじ向けて、ただそれだけ答えた。

「ううさ、鳳のことは分つている。だがお前は何をして居るのだね。それを殺しているのか、そ

れとも助けて居るのか？」

彼は返事をしなかつた。松明はもう燃えつかしてしまつた。彼は黙つたまま暗がりの中に立つて

いたが、やがて、月光のきれいにかがやいて居るのを見た。

4

彼は寝台からとび下りると、月の光を頼りに裏口に行って点火の道具をさがし、松明に火をつけ、水甕の内側を照らしてみた。果して一匹の大きな風が中に落ちていた。だが、中の水が少なくなつてしまつたので、漏い出すことができず、ただ水甕の内側に沿うて、ひっかきながら、ぐるぐる廻るばかりである。

「こい氣味だ！」彼は毎夜、毎夜、家具類を囁り、さわがしくて安眠もできないのはこいつらの仕業だと思うと、とても気持ちがスウーとした。彼は松明を土壁の小さな穴に挿しこんで、見物していた。そうするとそのひぶらな小さい眼が、彼に憎しみを起させた、手を伸ばして一本の芦（アシ）を抜き出すと、風を水の底へグイと押し沈めた。しばらくたつて、手をゆるめると、風は同時にまた浮び上ってきて、やりぱり甕の内側をひっかきながらぐるぐる廻つた。だがひっかき方は前ほどの力はない、眼も水の中にしつかり、ただ尖つた真赤な小さい鼻先だけをポツンと出して、チューチューチューと氣ぜわしく途切れがちに呼吸した。

彼は近づくあまり赤い鼻の人間を好まないふうがあった。だがいまその尖つた小さな赤い鼻をみると、ふと可哀そうな気がして、すぐまたその芦の棒を、風の腹の下まで差し込んでやつた。風

はひっかきながら、ウンと力を出して、芦の棒を伝わつて匍い上つた。彼は風が全身——濡れてベとべとになった黒い毛、大きな腹、蚯蚓（ムカデ）のような尻尾——をあらわにしたところを見ると、また腹

立たしく憎らしさを覚えて、急に芦の棒を一よりすると、ボタンと音がして、風はまた水甕の中に

息はなかつた。後に人からきいたところでは、お前の父のつくった剣に、最初に血を飲ませたのは、つまりその人自身——お前の父親であった。そして父親の幽魂が祟りをするのを怕れて、その胴体と首とを別々に、門前と裏庭に埋めたということだ！」

「帰つてこなかつた！」と母親は冷静にいった、「わたしはあちこち聞いて廻つたが、まるで消息はなかつた。後に人からきいたところでは、お前の父のつくった剣に、最初に血を飲ませたのは、

母親は立ち上つて、寝台のところの木板を取りはずし、寝台を下りて、松明をつけ、裏口に行つて鋤をとつてきて、それを眉間尺に渡していった、「掘つてじらん！」

眉間尺は心臓がドキドキした。だが落ちついて一鋤一鋤しづかに掘つて行つた。出でくるものはみな黄土であったが、およそ五尺ばかりも深く掘つて行くと、土の色が少しづがつてきた、ボロボ

9

10

窓から前方にサツと刎ねると、首は地面の青い苔の上に落ちたが、同時に剣は黒色の男に渡した。

あげ、その熱い死んだ唇に向つて二度接吻し、そして冷やかに銳く笑つた。

い着物を引きちぎった、二口目には身体が全部なくなり、血痕もまたたく間に舐めつくし、ただ骨を噛み碎く音だけがかすかにきこえた。

一番先頭にいた一匹の大きな狼が黒色の人に向って飛びかかつて行つた。彼が青い剣を一振りすると、狼の頭は地面の青い苔の上に落ちた。別の狼たちははじめの一 口でその皮を引きちぎつた、二口目には身体全部がなくなった、血痕もまたたく間に舐めつくし、ただ骨を噛み碎く音だけがか

彼はやがて地上の青い着物を拾いあげて、眉間尺の首を包むと、青い剣と一しょに背中に負い、身をひるがえして、暗がりの中を王城に向つて慄々と歩いて行つた。

狼たちは立ちどまつて、肩を聳やかし、舌を出し、フウフウと喘ぎながら、緑色の眼光を射て彼が悠々と去るのを見ていた。

柔の性質を改めたのだと思つた。そして何ごとも心にかかることはない気持ちで、枕につくとすぐ眠り、朝早くに眼をさまして、いつもと別に変った様子もなく、しづかに不俱戴天の仇をさがしに

出かけようと決心した。
だが彼は疲れなかつた。寝返りばかりうつので、いつそ起きあがつて坐ろうかと思つた。母親の失望したような、ひそやかな長い溜息が聞えた。とうとう一番鶏の鳴くのが聞えて、もう子の刻で、

自分は十六歳になつたことを彼は知つた。

眉間尺は眼のフチを腫らしながら、後ろを振り向きもせずに戸外へとび出した。青い着物をきて、青い剣を背負いながら、大股に歩いて、すんずん城内へ急いだとき、東方にはまだ太陽の光は射していなかった。杉林の一つ一つの葉木には、露の珠がかかっていて、その中には夜気がひそん

だん暁の色合いに変わった。はるか前方を望むと、ほんのりと灰黒色の城壁と姫垣が見える。

びになつて、ボンヤリと立つてゐる。女たちも時々戸口の隙間から頭をのぞかせる。彼女たちの多くは眼のフチを腫らしてゐて、髪の毛は梳かないままである。黄ばんだ顔にはまだ化粧もしていな

あつた。眉間尺はこんな敵にとつがまってしまい、全く怒るにも怒れず、笑うにも笑えず、ただわびしさを覚えるだけであつた。だがその場を脱れるすべはなかつた。こんなふうで一鍋の粟が煮えるくらいの時間がたつて、眉間尺はもう焦立つてきて全身が火を吹いた。見物人はだがもとのま

まで減りもせず、尽きぬ興味をもつてゐるかのようであつた。

からびた顔の青年の顎を突きあげ、そして彼の顔をじっと見据えた。その青年もまた彼の顔をしづらく見ていたが、いつしかそっと手をゆるめて、姿を消した。その男も姿を消した。見物の者たちもつまらなさそうに散って行った。ただ数人のものがなおも肩間尺に、年齢、住所、家には姉がい

るがなどどうるさくたずねたが、眉間尺は一切、彼等にとり合わなかつた。
彼は南の方へ歩いた。城下がこんなに人混みでは、いつ間違つて誰かを傷けるか分らぬ、いつそ
南の城門の外で国王の帰りを待つて、父の仇を討とう、あのへんなら土地も広いし人通りもまれだ

らんで、そのままで南の城門近くまできて、やつと次第に静かになつた。

「聞くがいい！」と彼女は嚴肅にいった。「お前の父はもとは刀鍛冶の名工で、天下第一であつた。父の仕事道具をわたしはとっくに売り払つて貧乏をしのいできたので、お前はもう何の痕跡も見ることはできない。だが父は世間に唯一無二の刀鍛冶の名工だった。二十年前、王妃が一かたま

りの鉄を産みおとした。それはあるとき鉄の柱を抱きかかえて孕んだということが、純青透明な
鉄であった。大王はめずらしい宝ものだと知つて、それを用つて一口ひとくちの剣をつくり、それで國を保
んじ、それで敵を殺し、それで身を防ごうと考えつかれた。不幸にしてお前の父がそのときちよろ

で、二口の剣を仕上げなされた。

白い蒸気が立ちのぼったとき、地面も動搖するかと思えた。その蒸気は天空の半ほどで白雲に変わ
り、この家に蔽いかぶさり、次第に薄赤い色になって、一切のものみなを桃の花のように映し出
た。わが家の真黒な鑪の中には、真赤な二本の剣が横たわっていた。お前の父が清い井戸水をゆつ
くり滴らすと、その剣はスウースウーと唸りながら次第に青色に変つて行つた。このようにして七
日七夜たつと、剣は見えなくなつたが、よく見ると、やつぱり鑪の底にあつた。純青で、透明で、
まるで二すじの氷のように。

大歓喜のかがやきが、お前の父の眼からあたりに射出された。父は剣をとり上げて、拭きに拭いた。だが悲惨の歎が、また父の肩と口とあらわれた。父はその二口の剣をそれぞれ別にして二つおさめた。『この数日間の光景をみただけで、誰にもよく分る、剣はもう出来あがつたことが分かる』と父は愁わしそうにわたしたかった。『明日になれば、必ず行って大王に献上せねばならぬ。だが剣を献上する日は、つまりわしの命の尽きる日だ、われわれはこれで永遠に別れねばならぬだらう』

『あなたは……』とわたしはことの意外に驚いて、父のいう意味をはかりかね、どういえればいいのか分らなかつた。ただわたしはこういうだけだった。『あなたはこの度、これほど大きな功勞をたてなされて……』と。

『ああ！ お前にどうして分らう！』と父はいった。『大王は生まれつき、猜疑心がつよく、また残忍だ。この度、わしは大王のために世間に二つとない剣をつくり上げたが、大王はきっとわしを殺してしまうだらう、わしが再び別の人のために、大王に匹敵する、あるいは大王に勝る剣を持つることのないようだ』

わたしは涙を流した。

『お前悲しまないでくれ。これは避ける方法はない。涙は決して運命を洗い落すことはできない。わしはだがもうここに準備しておいた！』と父の眼から突然、縊妻のような光がかがやいて、

がみな顔を伏せて行った。そのときちょうど眉間尺は一輪の黄色い蓋をかけた大きな車が走つてくのを見た。真中に一人の飾った衣裳を着た太っちょが坐つてゐる。胡麻塩のアゲ顛で、小さな頭だ。腰のあたりにはどうやら彼の背中にあるのと同じ青い剣を佩びているのが見える。

彼は我知らず全身がサッと冷たくなつた。だがすぐまた灼けるように熱くなつた、まるで猛火に焼かれたかのように。彼は手を肩さきに伸して、剣の柄を握りしめるとともに、脚をふみ上げて、ひれ伏している人々の首と首との隙間を跨いで進んだ。

だが彼は五、六歩進んだばかりで、もんどう打つて倒れた。それは誰かが突然、彼の片方の脚をつかんだからである。ころげた途端に一人の乾からびた顔の青年の身体を压しつぶした。彼は剣の先が青年を傷けることを怕れ、吃驚して起きあがつて見ると、肋の下にひどい拳骨を二つへらへた。彼はとやかく争つている暇はない、再び街路の方をみてみると、黄色い蓋の車はもう通りすぎていたばかりか、それを取り巻く騎馬の武士たちも一団になって駆け抜けていた。

路ばたの一切の人々もみな立ちあがつた。乾からびた顔の青年はだが眉間尺の着物の襟を堅くつかんで、手を放そうとせず、彼のために大事な丹田を圧しつぶされた、必ず保証してくれ、もし八十歳にならぬうちに死ぬようなことでもあれば、身代りになつて命を償つてくれといふ。閑人たちがまたすぐに二人を取り巻いて、ポンヤリと見物していた。だが誰も何とも口をきかない。そのうち誰かがそばから「こと三ことからかつたが、それは完全に乾からびた顔の青年に加勢するものでやむを得ず、身をすり抜けて、人ごみを避けて後ろにさがつた。眼の前にはただ人々の背中と伸びた首が見えるばかりである。

ふと、前の方の人たちがみな続けざまに土下座した。遠くの方から二頭の馬が並んで駆けてきた。その後から棒、戈、刀、弓、旗をもつた武士が、路いっぽいにモウモウと砂塵をまいてやってくる。次には四頭の馬が曳く大きな車がきた、その上には一隊の人が坐つていて、あるものは鐘を鳴らし太鼓を打ち、あるものは何といふか名前も知れぬ厄介なものを口で吹きなras。その後はまた車だ、中にいる人はみな派な衣裳をまとっている。老人か、でなければ太っちょで、めいめい顔じゅうに油汗をかいている。つづいてはまた一隊の刀槍、剣戟の騎馬の武士だ。土下座の人たち

。

眉間尺は何か大事件がやつてゐるであろうことを予感した、彼等はみんな焦々しながら辛棒づくその大事件を待つてゐるのだと。

彼はそのまま前へ進んでいた。一人の子供が突然走つてきて、ほとんど彼の背中の剣の先にぶつかりそうになつたので、彼は吃驚して身体じゅうに冷汗をかいだ。北の方に方向をかえて進んだ。王宮の近くになると、人々は押しあいへし合い、ぎつしりと密集して、みんな首を伸していだ。車だ、中にいる人はみな派な衣裳をまとつてゐる。老人か、でなければ太っちょで、めいめい顔じゅうに油汗をかいてゐる。だが人々は背後から押しよせてくる。彼は

。

「すみません。だがあなたはどうやって私のために仇を討つて下せるのですか？」

「君がわしに二つのものをくれさえしたらいい」と二つの燐火の下の声がいった。「やの二つのもののかい？ 聞くがいい、一つは君の剣だ、二つには君の首だ！」

眉間尺は奇妙なことだと思って、ちよつと疑つだけれども、しかし決して驚きはしなかつた。彼が一とき黙つてゐる。

「君はわしが君の生命と首とをだまし取るのではないかと疑つてはいけないと暗がりの中の声はまたきびしく冷やかにいた、「このことはすべて君次第だ。君がわしを信じるなら、わしはやる、君が信じないなら、わしはやめる」

「だがあなたはどうして私のために仇を討つて下せるのですか？ あなたは私の父を知つてゐるのですか？」

「わしは前から君の父を知つてゐるが、それは前から君を知つてゐるのと同じだ。だがわしが仇を討つてやろうというのは、決してそのためにではない。利口な少年よ、君についておこう。君はわしがどんなに仇討ちがうまいかを知らないのか。君の仇はつまりわしの仇で、彼もまたつまりはわしなのだ。わしの靈魂にはこんなにもたくさん、人とわしとが加えた傷がある、わしはもう自分自身を憎んでいるのだ！」

暗がりの中の声が止つたとき、眉間尺は手をあげて肩先から青い色の剣を抜きとり、手順に後項

首は突然、水の尖端まで昇つて停止し、幾つも回転をやつた後、上下昇降をはじめた。眼の玉を左右に向けてチラリチラリとながめるが、とても美しくなまめかしい、口には相交らず歌をうたう、

アア、アアだ、アア、アア、

愛よアアだ、アア、アア！

血ぬられた一つの首だ、愛よアア。

私は用う一つの首をだ、そして万夫なし！

彼は用う百の首、千の首を……

ここまで歌うと、それは沈んで行くときであつたが、もう浮び上つて来なくなつたばかりか、歌の文句もよくきき分けられなかつた。湧き上る湯も、歌声のかすかになるにつれて、だんだん低く弱まつて、まるで潮が退くのと同じであつた。ついに鼎のフチより下に降り、遠くからは何も見えなくなつた。

「どうしたのだ？」としばらく待つて、王は我慢できないうようにたずねた。

「大王」と黒色の人は半ば跪きながらこつた。「首はこまや鼎の底で世にも不思議な団子の舞い

「じうしたのだ？」としばらく待つて、王は我慢できないうようにたずねた。

「ハハ！ わしは前から君を知っている」とその男の声がいった、「わしは君が雄剣を背負って、君の父のために仇討ちをしようとしていることを知っている、わしはまた君が仇討ちに失敗したことも知っている。失敗したばかりか、今日もう密告した者がいて、君の仇はとっくに東の城門から宮中へ帰り、君を逮捕する命令を出したのだ」

「ああ、母親の溜息は無理もない」と彼は低い声でいった。

「あなたがですか？　あなたが私のために仇を討つて下さるうといふのですか、義士？」

「では、あなたはわれわれ孤児と寡婦とに同情して？……」

やかにいった、「義侠とか同情とか、そのようなものは、もうどうでもいい。今ではインチキ債権の資本になってしまった。わしの心の中

れつぱちもない。わしはただ君のために仇を討つてやるだけのことだ！」

慰めいたすことができようかと存じまして、とくに申しあげる

「それは黒く瘦せた、乞食のような男でいいわいませう。青い着物をきて、田舎者らしい顔つきの男だ。」

を上手につかう、空前にして絶後、世に並びなきものだと申すのぞ。まゝものはないけれども、これを見たら退屈を解きほぐし、天下太平になると申す。

ころが、ではそれをやつて見るとみなが申しましても、その畢竟
要だし、第二には金鼎きんていが必要だと申すのでござります。……」

「金育？」腹がそれじゃ（象徴とされる）金魚だから腹がモヤー」と
「わたくしめも、全く左様に考えるのでござります。……」

という声の終わらないうち、四人の武士がその小姓と一しょ

解きほぐして、天下太平になることを願つた。もしうまく行か
のようふ黒、複数に男が鍋をそそぐのじがう、彼等はござ塵じごじん

の髪の毛までが、昨日ほどに黒くてきれいではないといつたて愛嬌をまきちらし、特別に七十何回もつねつたので、やつと

午すきてから、国王は起きあがると、何だかまた機嫌がわる。

「ああ！　つまらない！」と彼は大きなあくびを一つしてから

もない気持ちであった。白鬚の老臣の説教や、ちんちくりんの聞きたてしまった。近ごろでは綱渡り、竿昇り、玉投げ、

奇妙な芸事とれもみなぎはり面白くない。彼はしいても、一たび爆発すると、青い剣をとつて、何かちよつとした

こつそり抜け出して宫廷の外で遊んでいた二人の小姓が、

顔が土色に変つたが、一人はしかし大丈夫だというふうに、土よつて、平犬／＼ながづ、へつじ。

黒色の男の歌声が止まつたと思うと、その首も熱湯の中央に

すると上下に顫動した。顫動から速度を加えて起伏の游泳になつた。

然、大きな眼を見はつた、漆黒の眼の玉は特別に生き生きと/or>歎をうごか出した。

王の恵みは流れゆよ、わわくひるぐ

怨敵を克服し、怨敵を克服したよ。何たる強さ！
宇宙には窮りあつて、万寿は限りなし。

青きその光よ、永遠に忘られず。

堂々たりだ、アイアイヨー！

民が大いに憤って、涙にむせびながら、あの二人の大逆不道の逆賊の靈魂も、いま王と一しょに祭礼を受けることを口惜しがつた。だがそれはどうにも仕方のないことであつた。

その後に皇后と多くの王妃の車だ。人民は彼女たちを見たし、彼女たちも人民を見て、ただ泣くばかりだ。その後には大臣、側役人、ちんちくりんなどの輩で、みんな哀しそうな顔つきをつくついていた。だが人民はもう彼等の方を見なかつたし、行列も目茶目茶に乱れて、くずれてしまつてゐた。

(注) 初め『眉間尺』と題して雑誌に発表し、のち『舞劍』と改題して『故事新編』に入れた。

訳者はこの編の出典について原作者に訊ねたところ「根拠は忘れて仕舞いました、幼い時に読んだ本から取ったのだから、恐らく『吳越春秋』か『越絶書』の中にあるだらうと思ひます」という返事であった。『吳越春秋』(漢の趙建の作)や『越絶書』(漢の袁康の作)の中にもこの話に似た断片的な叙述は見えるが、筋は全くちがつてゐる。魯迅が編集した『古小説鉤沈』の中の『列異伝』(魏の曹丕の作ともいふ)に見るものがストーリーを形成している。まだそれよりやや詳しく述べているのは『搜神記』(晋の干宝の作)に見るものだ。

わが国にも眉間尺の話は早く伝えられて、『法苑珠林』(唐の釋道世の編著)から採ったと思われるが『今昔物語』(卷九、第四十四話)の中に見え、また『太平記』(巻十二)『曾我物語』(巻四)『宝物集』(巻五)にもこの話が見える。

をやつております、そば近く寄らなければ見ることはできません。臣も法術でこれを上に昇らすことはできないのです。というのは団田の舞をするには必ず鼎の底でなければならないからでござります」

王は立ち上つて、金の階段をまたぎ下り、焼けるような熱さを我慢して鼎のそばに立ち止まり、首をのばして覗いた。水は鏡のように平かだ、その首は仰向けになつて水中に横たわっている、両眼でまともに王の顔を見ながら。王の眼が首の顔をまっすぐ見えたとき、首はニッコリ笑つた。この笑顔を王はいつかどこかで見覚えがあるようになつたが、しかしながらそれが誰であるかを咄嗟には思い出せなかつた。驚きいぶかつてゐるやううどその時、黒色の男はもう背負うた青色の剣を抜き拂つて、ただ一通り、稻妻のようになつて王の後頸窓から切りおろした、ボトント音がして、王の首はもう鼎の中に落ちていた。

仇同士が顔を合わせると、特別に眼ざといものだといわれれるが、ましていま狭い鼎の中での出会いである。王の首が落ちて水面にとどいたかと思うと、眉間尺の首がそれを迎えて、懸命に王の耳輪にガブリと咬みついた。鼎の水はたちまち沸騰して湧きあがり、ザアザアという音がした。二つの首は水中での死闘だ。およそ二十合ばかりの咬み合いで、王の首は五か所に傷をうけたが、眉間尺の首は七か所うけた。王はまたざるかしく立ち廻つて、眉間尺の後ろへ廻りこむ。眉間尺はふとした油断から、とうとう王に後頸窓に咬みつかれて、どうしても振り切つて脱れがして、王の首はもう鼎の中に落ちていた。

人々は氣を取りなおして、宮殿の門の外で拂いあげる方法について相談した。およそ三度も粟飯が煮えるほどの時間をかけて、とにかく一つの結論に到達したわけだが、それは、料理部屋から金網の杓子をあつめてきて、武士に命じ力をあわせて拂いあげるというのであった。

道具はやがて集められた、金網の杓子、底に孔をあけた杓子、金の盆、雑巾などが鼎のそばに置かれた。武士たちは着物の袖をまくり上げて、金網杓子やら、孔あき杓子やらで、一せいにうやうやしく拂いにかかつた。杓子と杓子とが触れあう音、杓子が金の鼎をこする音。水は杓子がかきまぜられるに随つてぐるぐる廻つた。しばらくやつて、いつもうまく立ち廻つて、眉間尺の後ろへ廻りこむ。用心ぶかく両手でゆきくりと杓子をもあ上げた。水は杓子の孔から珠のようになつて漏れて行き、杓子の中には眞白な頭蓋骨があらわれた。人々は驚きの叫びをあげた。彼はその頭蓋骨を金の盆にうきが同時にね上り、それは完全に五尺以上もあつたが、それから後は一切が静かになつた。

ながい間、何の気配もなかつた。国王がまずイライラし出した。つづいて皇后と妃、大臣、側役人たちもみな焦立つ、ちんちくりんの小人たちはもう冷笑をはじめた。王は彼等の冷笑をみると、自分が馬鹿にされているような気がして、武士を顧みて、彼等に君主をあなどる不逞の人民を牛を煮る鼎の中に投げ込んで煮殺すように命令しようとした。

だがその時、水の沸騰する音がきこえた。炭火も燃えさかり、その黒色の人を反映して、赤黒く、まるで鉄が焼けて赤みを帯びたようになつた。王はやつとまたこちらに顔を向けた、その男はもう両手を天に向けて伸ばし、眼をあてなきものにそそいで、舞踏しながら、ふと鋭いキイキイ声を出して歌い出した。

「アア、天よ！ われらの大王の首はまだこの中にあるのだ、アイアイアイ！」と六番目の妃が突然、発狂したように泣き騒いだ。

上は皇后から下はお伽の臣にいたるまで、みなハツと氣がついて、そそくさと散らばつて行つたが、あわてふためいてどうしていいか分らず、めいめいに四つ五つもぐるぐる廻りをした。一人の、最も知恵才覚のある老臣がまたひとりで前にすすみ出て、手を伸して鼎のフチのところをちょつと触つてみて、そして全身をブルツとあるわせる、そのまま引きさがつて、二本の指を伸し、口のところへ持つて行つていつまでもフウフウ吹いていた。

人々は氣を取りなおして、宮殿の門の外で拂いあげる方法について相談した。およそ三度も粟飯が煮えるほどの時間をかけて、とにかく一つの結論に到達したわけだが、それは、料理部屋から金網の杓子をあつめてきて、武士に命じ力をあわせて拂いあげるというのであった。

道具はやがて集められた、金網の杓子、底に孔をあけた杓子、金の盆、雑巾などが鼎のそばに置かれた。武士たちは着物の袖をまくり上げて、金網杓子やら、孔あき杓子やらで、一せいにうやうやしく拂いにかかつた。杓子と杓子とが触れあう音、杓子が金の鼎をこする音。水は杓子がかきまぜられるに随つてぐるぐる廻つた。しばらくやつて、いつもうまく立ち廻つて、眉間尺の後ろへ廻りこむ。用心ぶかく両手でゆきくりと杓子をもあ上げた。水は杓子の孔から珠のようになつて漏れて行き、杓子の中には眞白な頭蓋骨があらわれた。人々は驚きの叫びをあげた。彼はその頭蓋骨を金の盆にうきが同時にね上り、それは完全に五尺以上もあつたが、それから後は一切が静かになつた。

ながい間、何の気配もなかつた。国王がまずイライラし出した。つづいて皇后と妃、大臣、側役人たちもみな焦立つ、ちんちくりんの小人たちはもう冷笑をはじめた。王は彼等の冷笑をみると、自分が馬鹿にされているような気がして、武士を顧みて、彼等に君主をあなどる不逞の人民を牛を煮る鼎の中に投げ込んで煮殺すように命令しようとした。

だがその時、水の沸騰する音がきこえた。炭火も燃えさかり、その黒色の人を反映して、赤黒く、まるで鉄が焼けて赤みを帯びたようになつた。王はやつとまたこちらに顔を向けた、その男はもう両手を天に向けて伸ばし、眼をあてなきものにそそいで、舞踏しながら、ふと鋭いキイキイ声を出して歌い出した。

ハハ愛だ、愛よ愛よ！

民草は闇を行くのだ、独裁者は

彼は用ひ百の首 千の首をた 万の首を！

一つの首を愛するのだ、血よアア！

アア、アアだ、アア、アア！

吉二通の二二

である。だが水の尖端から

るに随つて、ぐるりと旋回し、一方でまたくるくると自回転をする。人々には何だか首がそうやつて面白がつて笑顔をしているようにも見えた。しばらくたつて、突然、逆水の游泳にかわつた。渦まきに梭をつきとおすようで、水しぶきはね返つて四方に飛び散り、庭中に一しきり熱い雨をふりそそぐ。一人の小人が急にアッと叫んで、手で自分の鼻づらをなでた。彼は不幸にして熱い湯をかぶつて、苦しさにたえず、とうとう叫び声を出さずにはいられなかつたのである。

黒色の男と肩間尺の首もやがて口を閉じて、王の首から離れ、鼎の内側に沿うて一まわり游泳し、王の首が死んだありをしているか、本当に死んだのかを確かめた。王の首はもう息の絶えたことが分ると、四つの眼と眼が互に見合つて、かすかに笑うと、すぐに眼を閉じ、仰向いたまま、鼎の底に沈んで行つた。

等の口の一人がさすてて声をあげると、たちまち詠も歌も続いてさすに驚きの叫びをあげた。一人の者があざわらうと、金の鼎のところへ大股に進みよると、人々は我先きに一かたまりになつてワツとかけ寄つた、押しのけられて後の方にいたものは、人の首すじの隙間から向うをのぞき込むばかりであつた。熱氣はまだ人々の顔を火照らして焼けるばかりだ。鼎の中の水はしかし鏡のように平かで、その上には薄い層になつて油が浮き、いろいろな人たちの顔を映し出した、皇后、妃、武士、老臣、小人、側役人……。

るすべがなかつた。そのとき王の首は咬みついで離さず、だんだん咬み進んでいくばかりであった。鼎の外にまで何だか子供の苦痛の叫び声が洩れてくるように思われた。

洛ちつきはらつて、見ても見えない青い剣を握った腕を大きく伸ばした、まるで一本の枯枝のようだ。首を伸ばして、鼎の底をじっと見てゐるようであった。腕が突然、曲げられたかと思うと、青い剣はいきなり彼の背後から打ちおろされた、剣があふれると同時に首が落ちて、鼎の中にころげ込み、ポンという音がして、雪白の水しぶきが空中に向つて、同時に四方にとびあがつた。

、ほとんど咬み切るばかりであった。王は堪えられずして一声「アイヨー」と叫んで口を開けると、眉間尺の首はその機に乘じてもがき流れ、くるりと向き直ると王の下顎に死ぬほどの力をこめ、ガツチリ咬みついた。彼等二人とも咬みついて離さないばかりか、ありつけの力を用って上と下に引っ張ったので、引っ張られた王の首はもう口を合わせることもできなかつた。そこで二人よ

麻塩であったのだから、黒いのも処置にむづかしかった。夜半ちかくまで討論して、何本かの赤アゴ鬚を選び出したものの、間もなく九番目の妃から抗議が出た、彼女は王に何本かの真黄色い

夜半すげても、まだ何の結論もでない。人々はそれでもあくびをしながら討論を続けたが、二番が鳴くときになつて、やつと一つの最も慎重で妥当な方法が決定された。それは、三つの頭蓋骨王の胴体とを一しょにして金の棺に入れて埋葬するしか仕方がないということであつた。

な駆けつけて国王の「大葬」を拝観した。夜があると、道路はもう人々の群れが押すな押すな、その間にはまたたくさんの祭卓がおかれていた。午まえになつて、やつと先払いの騎士が手綱をゆるめてやつてきた。それからまた大ぶんたつて、儀仗が見えた、旗、棍棒、戈、戟、弓、大刀、黄金の鍼などといった類である。その後が四輪の楽隊車である。さらにその後から黄色い蓋がこぼこ路のために上つたり下つたりしながら、だんだんこちらへ近づいてきた。こうして靈柩車はあらわれたのだが、上には金の棺をのせており、棺の中には三つの頭と一つの胴体がいれられ

ちがわない、あの少年の頭さえも見分けがつかなかつた。皇后が王の右の額には傷痕が一つある、それは太子のときに跌ておとけがをしたからである、恐らく骨にも痕跡があるかも知れないといつた。果して、ちんちくりんが一つの頭蓋骨にそれを見つけた。人々が歓喜しているとき、ほかの一人のちんちくりんがまたいくらか黄色がかつた頭蓋骨の右額にも似たような痕あざを見つけた。

側役人たちはすぐに鼻すじの研究をはじめた、一つのは確かに比較的高いよう見えた、だが結局のところいくらの違いもなかつたし、最も残念なことは右額の上に跌げた傷の痕跡がないことであつた。

「ましてや」と老臣たちは僧侶に向っていった。大王さまの後頭骨はこんなに失っていたのか知らん?」

皇后と妃たちはめいめいに思い出してみて、あるものは尖っていたといい、あるものは平らだった。流あらず役人を手込んできて、「さう」と二つ、彼は一二とも反事ができなかつた。

その夜、王公大臣会議が開かれて、どのが王の頭であるかを決定しようとした、だが結果は昼間と同じであった。そのうえ髪や鬚まで問題を起した。白いのはもちろん王のものだとして、しかし

度神戸芸術工科大学「組版・タイポグラフィ論」第9回・第10回授業（担当・前田年昭）

5

3

つして入れた。

「アア！ わが大王よ！」と皇后、妃、老臣から側役人いたる類が、みんな声をあげて泣き出した。だが間もなく次々に泣くことをやめた。それは武士がまたもや一つ同じような頭蓋骨を撫いあげたからである。

彼等が涙に曇った眼で、ぼんやりあたりを見廻すと、まだ武士たちだけが顔じゅう油汗を流して、まだ撫っていた。その後で撫い出されたものは一かたまりになつたグシャグシャの白い頭髪と黒い頭髪であった、それから可憐なものこまごまごしたものがあつたが、白ハツと黒ハツのようであげたからである。

あつた。その後でまた一つの頭蓋骨、その後では三本の簪。

の妃が焦立たしそうにいった。

人々は氣を落ちつけて、頭蓋骨を丁寧に見るより仕方がなかつた、だが色も大きさも、ほんと